
春一番

yoshina

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春一番

【Nコード】

N4239B

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

一話完結型小説。ほのぼのとした会話中心。しかし時々シリアスなものも。平次を筆頭に、高木・園子・哀・和葉が若干多めのオールキャラです。

1、Tea Time

神戸のとある高級ホテルの最上階。

青年が品の良い仕草でカップを持ち中の香りを楽しんでいる。

テーブルを挟んで向かい合った青年も意外と慣れた感じで紅茶を飲む。

「どうです？ ロンドンから直接持って帰ったきた茶葉ですが」

「紅茶はようわからへんのやけど、ええ香りってことぐらいはわかるで」

「そんな流麗な作法でカップを持つ人が紅茶を知らないとは思えませんが」

「んー、茶道習ってたしちゃうか？」

まあそういうことにしておきましょうと色白の青年は再びカップに口をつける。

ホンマやって、と色黒の青年はカップをソーサーに置く。

部屋の外にはガードマンが立っているがこの室内には2人しかいない。

白馬探と服部平次。

今晚怪盗キッドがこのホテルの隣にある美術館に

やって来るといふ予告状が届いたのだ。

予告状が届いた日に偶然イギリスから帰国していた白馬は自分が行

かずして誰が

彼を捕まえるのだと言わんばかりに早速神戸にやって来た。

そして神戸にいくついでに途中にある大阪で服部を呼び寄せていた。ちなみにもう一人のライバル、こちらはまだ公言できないのだが、工藤新一はやんごとなき事情で来ることはなかった。

服部にはその理由がわかっていたのだが。

——そら、遠足やったら来れへんわなあ。

かわいそうに、と服部は心の中で小さな友人に同情した。

白馬はライバルだと公言しているのくらいなので、キッドに執心しているのは

当然のことだ。

しかし服部はそうでもなかった。

大阪に予告状が届いたり、自分の大親友（↑自称）が関わってくる時以外は

この若き怪盗に興味を示すことはあまりない。

彼曰く、

「あの怪盗を捕まえるのは白馬か工藤。それ以外はおらん」

だそうである。

だが今回、白馬に誘われる形でここにやって来た。

彼に「捕まえる手伝いをしてほしい」と言われついてきたが
実のところキッドがやってくるまでの話し相手がほしかったんじゃない

ないのだろうかと一瞬思ってしまった。

警察の誰かを捕まえて時間つぶしくらいはできるだろうが、彼の頭脳についてくる人物がそうそういるとは思えない。加えて年上ばかりではつまらないだろう。それに比べると白馬と服部は共通点が多い。

高校生、探偵、警察官僚の父親、名家、e t c

初対面の時こそ最悪だったが、それ以降はそんなにいがみ合うことは無くなっていた。

白馬が彼に対する認識を改めたのが大きな原因だろう。

ここでその辺りについて言及するのは避けるが、とにかく白馬にとって

彼が良き同業者であるのは間違いなかった。

「なあ。怒らんこと前提で1つ聞いてもええか？」

紅茶の隣に置かれた洋菓子を手を伸ばし、包装を破りながら問う。

「なにか引つかかるようなものがありますが、いいでしょう。ここへ呼んだのは僕ですし。何ですか？」

白馬も同じく洋菓子を手に取った。

そんな淡々とした様子に服部は少し躊躇ったが、思い切って言うてみることにする。

「お前って、友達おるんか？」

一瞬の沈黙。

ぱき、と白馬の持つクッキーが割れた音がした。

「……別に怒りはしませんけどね。君はホント失礼なことを言う人ですね」

いや怒ってるやん！と彼は内心つつこむがそんなことは後回し。
慌ててフォローを入れる。

「ちゃうちゃう！別に白馬が嫌味な奴やからとか気障ったらしいからとか

そういう意味とちゃうで？ただ、お前ってどう見ても同年代とは話あわなさそうやし

高校生でイギリス留学しとるし。友達作る機会無いんとちゃうかな
くて思ただけや。

日本の高校おった時はどうやったんや？」

「そうですねえ……」

よくよく聞いてるとまた失礼な言葉が端々に織り込まれてるが、

そこは論点ではない。

服部は、白馬が友達が出来た環境にないのではないかと聞いているのだ。

ふむと白馬は考え込む。

友達とはいかなるものか？

江古田高校にいた時の事を思い出す。

恐らく黒羽快斗や中森青子とそのまわりにいた同級生のような関係を友達と呼ぶのだろう。

では自分の中にいたのか。

はつきりYESとは言えないだろう。

青子など、好意的にしてもらった人たちはいたが友達とよべるようなものでは無かったと思う。

小泉紅子も勿論違う。

では黒羽快斗はどうなのか。

「友達とよべるとは思えませんが、僕と張り合える人物ならいましたよ」

黒羽であろうが怪盗であろうが”彼”が自分と並ぶ頭脳の持ち主には違いない。

「お前と張り合えるやつがその辺の高校におったんか？ぜひともその顔

見てみたいもんやな。クラスメートやつたんか？」

「ええ。化かしあいとまではいきませんが、腹の探りあいとは中々楽しいものでしたよ」

そう、友達ではなかったが楽しかった。

彼と話すのは。

一方的にこちらが楽しんだような気もするが。

「そつえば君はどうなんでしょう？」

「俺？」

「君にはたくさん友達がいますけど、その中に嫌味っただけで気障な僕は

入ってもらってらっしゃいますか？」

先ほどの彼の言葉を使ってニツコリ問い返す。

この辺が嫌味っただけで嫌いと言われる所だろう。

自分とは違って、人懐っこく愛想もいい彼のことだ。

勝手に人が集まってくるだろうと白馬は思った。

「そら友達はぎょうさんおるけど、親友みたいなもんは片手で数えても

十分すぎるほどや。1人か2人ってとこちゃうか。……お前がええて言うて

くれるんやったらその片手に加えたいところやな」

友達ではなく親友で。

どやろ？と二カつと笑い返す。

その笑顔が白馬にはまぶしかった。

「君の親友に加えさせてもらえるなんて光栄ですね」

「そんじゃあ決定。お前は俺の親友な」

乾杯をするかのごとくティーカップを右手で掲げる。

白馬もそれに倣って掲げる。

そしてくすりと笑った。

「……………紅茶ってこんなふうに扱うものじゃないんですけどねえ」

「だから言ってるやん。紅茶のほうはようわからんて」

親友やったら細かいとこ気にすんなや、とつつこむ。

「どうやら僕は調子のいい人と親友になったようだ」

「調子悪いよりええやろ。そや、悪いといえはお前と同じくらい

ノリが悪い親友がおんねん。多分お前と話が合うはずやで。そいつもごつつホームズ好きやから」

「もしかしてどこぞの海外にいるという工藤某君のことですか？」

「そう、そいつ！でも某てお前……」

「その人と会ったことないですからね僕は。でもいつかお会いしてみたいですね。」

「同い年のホームズフリークで探偵というのがなんとも興味深い」

「今度会うことがあったら伝えておくわ」

「ええ。楽しみにしていますよ」

服部と仲のいい工藤という探偵。

名前は良く聞くが、自分がロンドンに行ったのと入れ違いに高校生探偵として名を馳せたせいがあったことはない。

でも服部があそこまで気に入っているなら、面白い人物には間違いない。無さそうだ。

彼といると何か自分の知り合いの輪まで広がっていきそうな気がした。

「あと1時間ぐらいでアイツ来るな」

「今はそっちのほうが好きですね」

もうすぐあの怪盗がやって来る。

直に会うことがあったら言ってみようか。

「紹介しますよ、彼が僕の親友の服部君です」

クラスメートだった彼なら驚くと思う。

あの白馬探が親友と公言するなんて、と。

そんな彼の驚いた顔を見ているものいいかもしれない。

いつのまにか2人の間にあった洋菓子は全て無くなっている。

メインディッシュは怪盗キットでどうだろうか？

1、T e a T i m e（後書き）

忙しいけどネタはある。という状況を打破するための苦肉の策がこれでした。（汗）

短編なら数本ネタがありますので、思いついたら投稿させていただこうと思います。

ちなみにタイトル「春一番」はあまり他意はありません。

ただ、オフの私事が春一番が吹く頃には何とか終わってれば良いなという希望の元つけました。（笑）

不定期ですがよろしくお願いいたします。

2、蹴つとばせ！

どうもありがとうございました、という言葉と共に45度お辞儀をする。

相手の女性も隣の男性に肩を抱えられながら少しだけ頭を下げる。遠目からだったので女性の顔は見えなかったが、泣いていたように思えた。

警視庁の入り口付近で男女を見送った高木は捜査一課へ戻るべく踵を返すと

目の前に由美がいたので驚く。

「何かの事情聴取だったの？」

「え、ええ。先週世田谷で起こった遺産相続殺人の関係者ですよ」

「あー・・・・・・・・、あのドロドロ愛憎劇の果てに起こった事件ね」

どこぞのプライムタイムのドラマでやりそうな莫大な遺産を巡る殺人事件は

ワイドショー好きな由美もしっかり覚えている。

確か犯人は遺産を遺した故人の弟で、被害者が故人の愛人だったはず。

ということは年齢的に見て先ほどの男女のどちらかが故人の子供なのだろう。

「美和子から聞いたけど、あれ解決後も結構ごたごたしたんでしょ」

「……………そうですね。遺産を遺されたお祖父さんが急死だったせいで

遺書を書いてなかったのが全ての原因のようなんです」

廊下を歩きながら神妙な顔つきで高木が答える。

疲れが見える表情から、先ほどの事情聴取でもその遺産相続の件であの男女から色々愚痴のようなものを聞かされたのかもしれない。それでも悲しそうな顔はしなかった。

彼のこういったへとへとに疲れた顔やヘラヘラ笑った顔はよく見る。仕事でもプライベートでも。

比較的背の高い彼を横目で見上げながら由美はふとあることに気がつく。

「そつえば高木君で泣かないよね」

「は？」

「いつもヘラヘラしててさ。疲れないの？」

「と言われましても……………」

突然聞かれた彼は困ったようにハハと笑う。

この顔もまたよく見る表情だ。

「美和子の前とかでも泣かないわけ？」

恋人の前でくらい、いつもとは違った自分を見せてもおかしくな
いと思うのだが。

しかし彼は予想に反して真面目に返す。

「それは絶対に無いです」

「え、なんで？」

「だって僕が弱いところ見せたら佐藤さんはどこで泣いたらいいん
ですか」

思いのほか「男」っぽい答えに一瞬言葉に詰まる。

「いつも僕は佐藤さんには迷惑をかけてるんで、あの人が弱った時
くらいは
いつでも受け止められるようにしたいんです」

だから、自分が泣くところは見せられない。

これは高木の一種の信念なのか、自分自身に言い聞かせるように
静かに、だが
力強く言い足した。

一方そんな意外な返事に彼女は呆気にとられる。
そして大げさにため息を一つついた。

「……あーあ、高木君に惚氣られる日が来るなんて思ってもみなかつたわ」

「の、惚氣てなんかいませんよ!」

人が真面目に答えたのに酷いですよと彼は慌てふためく。
すぐ前にあんな男らしい信念を述べた人物と同じ人物とは思えない。

「はいはい。ご馳走様でした!……でもあんたわたし達の前でも泣かないし、
美和子の前でも泣かないならどこで泣くっていうのよ。まさか一生そのヘラヘラを
続けるわけじゃないでしょ?」

足を止め高木の前に立ちふさがってびしっと人差し指を彼の目の前に突き出した。
指された彼は思わず後ずさりするが、次にやはりまた困ったような顔をする。

「うーん……別に絶対に人前で泣かないと決めでもいませんけど」

「一人でも泣くこと無いの?」

「そういえば無いような…ただ機会が無いだけですよ。
そうそう泣く場面っていうのも無いじゃないですか。またいつか機会がありますよ」

「あーなんかそういう煮え切らない答えが嫌だわ！泣かないと決めたわけでもないし、
一人でも泣かないし、あんたどこでなら泣いていいわけ？」

周りにも人がいるにも関わらずじれったそうに頭を掻く。
一見よくわからない理屈で問い詰められた高木は、最後の台詞に何かを気付いたような素振りを見せた。

「あ、でも……」

「何？」

「心の中で、泣いていることはありますよ」

彼女の頭を掻き筆る手が止まる。

「僕だって悲しいときは悲しいと思いますから。それが表に出ないだけじゃないですかね」

そう言っ て彼がほんわかと笑う。

そして一瞬動きが止まっていた彼女が口を開こうとした時だった。

「おい高木！2丁目で事件があつたから初動捜査行つて来い！」
「あ、はい！」

先輩刑事から彼に声がかかった。
すぐに振り向いて威勢の良い返事を返すとそのまま由美に会釈をする。

「じゃあ由美さん、話の途中で悪いんですけど」
「あ、ああ、うん。がんばって」

行つてきますと言つて彼は急いで捜査一課へ向かう。
果然と由美は彼の背中を見送る。

「……だつたら私の前でくらい泣きなさいよ」

恋人の前で泣かないなら、心の中で泣くくらいなら。

佐藤と付き合い始めてからいつも綺麗になった彼の背中のスーツを眺めながら一人呟く。

自分でもよくわからない苛立ちと考えに戸惑いを覚える。

なんだか無性にその彼の背中を蹴りたくなった。

2、蹴つとばせ！（後書き）

実は平次の次に高木刑事が好きです。（笑）

3、富豪探偵

東京都心部にて事件発生。

名家の娘が誘拐され、身代金が要求されているのだ。

被害者の少女の家族から通報を受けた警視庁は早速対策本部を設置し、

身代金の受け渡し場所や電話の逆探知を話し合っていた。

そしてそこには目暮以下刑事達に混じり少年が2人。

工藤新一と服部平次である。

高校3年の春休みに遊びに来ていた平次を連れて新一が応援に駆けつけていた。

2人で大人の輪から少し外れたところで地図をにらんでいる。

そうこうしているうちに犯人から2度目の電話が鳴った。

誘拐された娘の父親は一瞬肩を震わせたが、目暮が頷いたのを確認してから

鳴り続ける携帯の通話ボタンを押す。

内容は一回目の時に言っていた身代金の確認だろう。

誘拐犯は1億用意しろと要求していたのだ。

名家ということもあり、何とかぎりぎり全額かき集めた父親は犯人に身代金の場所を指定される。

1億集めたことを聞いた犯人が声を立てて笑ったのが繋げたスピーカー越しに聞こえてきた。

「そうか、一億集めたのか。流石は元華族だ」

「そ、そんなことより娘は無事なんだな？こ、声を聞かせてくれな
いか？」

「ああ元気にしてるさ。……そうだな、もう一億上乘せするなら聞
かせてやつてもいいぞ。
あと1時間で用意してみろ」

「なっ!？」

犯人の傍若無人な提案に父親のみならず周りの刑事達も思わず声
を上げそうになる。

「そんなことできるはずが無いだろう!？この1億だけでも必死だ
ったんだ!」

「ほう、そうか。可愛い娘には2億の価値も無いと言ったんだな？」

「そ、そんなことは……っ」

言葉に詰まり携帯を握り締める父親の側で目暮達がどう答えさす
べきか

焦りながらもすばやく頭を回転させて考えていた。
上乘せして2億を1時間以内に用意するのはどうやっても無理であ
る。

しかしここで拒絶すれば娘の命がどうなるかはわからない。
そんな苦悩を知ってか知らずか、犯人はさも残念そうに付け足した。

「やれやれ、じゃあ少しだけお前の可愛い娘にどれだけ危険が迫っているか
教えてやるつか」

「ま、待ってくれっ!」

電話越しに拳銃の引き金を引く音がして父親が叫ぶ。
その時、叫んだ父親の前にある一文が目飛び込んできた。

『10億円用意すると言って下さい』

——10億だと!?

巨額な数字が東京一円の地図の裏側にでかでかと書いてある。
真っ白な裏側にペンで指示を書き、新一と平次が広げて目の前に出したのだ。

思いも寄らない行動に目暮達は止めることすらできない。
当然父親は当惑したが、新一が口パクで「早く」と言うので
覚悟を決め、言葉にする。

「じゅ、10億円用意しよう」

「っ!?!なんだと!?!」

「……む、娘の命は10億以上の価値があると言ってるんだ。それでいいだろう?」

これは父親が考えた返事ではない。

裏紙に更に新一が書き足し、これを答えるようにペンで指したのだ。

「……ははは！ 気に入ったぜ、その案に乗ってやる。
では約束通り娘の声を聞かせてやろうか」

その数秒後娘の声が父親の元に伝わり、涙しているのが端から見てもわかった。

そして再び犯人へと声が戻り身代金10億円の渡し場所を指定される。

用件を済ませた電話はそのまま切られ、急いで佐藤がホワイトボードに場所を書いた。

緊迫した交渉が終わるや否や、目暮は新一たちに慌てて詰め寄る。

「どういふつもりかね工藤君！？ なぜ10億なんて巨額を……!？」

「2億より10億のほうが持ち運びがしにくいからですよ。」

これまでの行動を見る限り犯人は恐らく1人か2人でしょう。

男数人集まっても10億運ぶのはもたつくはず。そこを狙えば捕まえられるかもしれません」

「な、なるほど……ってそういう意味では無くてな、工藤君。
10億をこの1時間で用意など出来ないと私は言いたいんだが……」

冷静に突拍子も無いことを言い出す彼に目暮はたじろぎながらも
つつ込む。

確かに奥の手として新聞紙を本物のお札に挟んで額を偽ることも出
来るが、

そういう手段はばれると危ないので使いたくなかった。

これからどうするんだと冷や汗をたらだら流す目暮に向かって
新一は爽やかスマイルでさらりと言い放つ。

「ああ、それなら僕が用意しますからご安心ください。
自分が言い出したことなのでちゃんと責任持ちます」

「何いーーーー!?」

そこにいた平次を除く全員が叫ぶ。

高木は椅子から落ち、千葉は意味も無く床に頭を打ち付けた。
白鳥も平静を装うとしていたがペンを持つ手が震えている。

「10億用意できるの工藤君!？」

いち早くショックから立ち直った佐藤が思わず駆け寄る。

「僕、親と事実上共同で持っている口座がいくつかあるんですよ。そこは自由に使っていていいと父から言われてるんで、それを利用します」

「へ、へえー……」

ペイオフ解禁したんで口座を細かく分けたんですよと彼はにこやかに言う。

顔を引きつらせながら佐藤は後ずさった。

親もそんな大金子供に持たすな、とそこにいる誰もが思った。

一方平然としていた平次が何かに気付いてように、手をぼんと叩く。

「でもお前、その口座の半分が海外やったんとちゃうんか。

1時間だけなんやし日本の銀行しか無理やろ」

「そういえばそうだったな。確か日本のほうだと5億くらいだから後は……」

服部、お前も5億出せ」

「何でやねん！お前が言いだしつぺやろっ」

「仕方ねえだろ。お祖父さんに頼めばすぐ調達出来ねえか？」

「まあ出来るけど……しゃあないなあ。その代わりお前のオトンの新刊裏ルートで発売前に貰うで」

「オーケー。つかお前そうじゃなくてもいつも発売前にあげてるだろ」

「今度はサイン付きや」

「わかったわかった」

もはや彼らの会話についていけるものはいなかった。
対策本部にいる大人全員が凍りつき遠い目をしている。

高校3年生が1時間で10億を調達。

しかもそれがどうしたと言わんばかりにあっさりとやってのけるのだ。

「白鳥さん……上流って何ですか？」

「……」

床から震えつつ立ち上がる千葉が、側にいる「上流階級」に問う。
しかしそのブルジョアでもその質問に答えることは出来なかった。

「あ、お久しぶりです。工藤です。急で申し訳ないのですが、

少しお金を調達したいので…」

「もしもし祖父ちゃん？平次やけど、5億貸してくれへん？」

静まり返った対策本部に少年2人の携帯だけが稼動していた。

3、富豪探偵（後書き）

見てわかるように、深○恭子の「富○刑事」をパロってみました。
（笑）

平次はワンダースワンのコナンのゲームで誘拐された時身代金が1億だったそうですが、

それをあの親はすぐに調達したらしいです。

だったら新一もそれくらいはあるだろうなあと思い、こんな突拍子も無い話が生まれました。この富豪ネタ、意外と続けやすい話かも？

しかしこの連載、平次の出現率高いですねー・・・（笑）

4、ミライヨソウス

「そついえば、進路希望調査の紙出した？」

「うん、さっき出してきたよ」

帝丹高校ののどかな昼下がり。

くじ運の強い蘭が先日ゲットした窓際の特等席に園子が椅子を引っ張ってきて

一緒に昼ごはんを食べながら談笑していた。
蘭は自作のお弁当。

園子はサンドイッチだった。

いつものことなのか、食べる前に蘭に一枚あげている。
サンドイッチとはいえあの豪邸の専属シェフが作ったものだ。
かなり、おいしい。

「じゃあ、大学は決まったの？」

「前から大学は決まってるんだけど、学部で迷っちゃって」

女子高生2人の話題は来年の受験である。

あと数ヶ月で3年生になる。

いやでも考えなければならぬ時期だ。

昼ごはんの前に担任に紙を渡しに行った蘭は

「あなたなら行けるわね」と言って貰っていた。

幼馴染のあの推理バカには劣るが、事実彼女は相当頭は良いである。

この辺は母の遺伝か。

「ふーん、どの学部で迷ってるわけ？」

園子がお嬢様らしくかめ、紙パックのストローを噛みながら問う。
蘭は少し間を置いた後、ぼつりぼつりと答えた。

「……最初は文学部だったのよ。でも最近法学も気になっちゃって」

「あーそれは迷うところだわ」

蘭が志望する大学の文学部と法学部は偏差値にかなり差があるのだ。

確実さを取るか希望を取るか。
微妙なところである。

「でもまだ高2なんだし、法学狙っておけばいいんじゃない？
後からいくらでも志望は変えられるんだし」

「うん、先生もそう言ってたわ」

がんばってみようかな、とあまりそんな気のなさそうな返事が来る。
まだまだ自分の足を引っ張る要素があるのかもしれない。

「でもなんで急に法学に興味出たの？なんかなりたいものでも出来た？」

「ええー？うーん…」

「ほら、言ってみなさいよ！誰にも言わないからさ」

先ほどから気になっていたことを机越しに少し身を乗り出して問うた。

興味津々の顔だ。

この表情になった園子に適うものはいない。

一瞬戸惑ったが、蘭は視線を横に流して照れくさそうに

「税理士」

ぼつりとそう言った。

頬を少しだけ紅く染めながら。
そしてその後すぐ連呼される。

「税理士ー！？」

「わ、ちょっと園子声が大きいよー！！」

思わず叫んだ彼女に蘭が慌てて手で押しとどめる。
しかし園子の勢いは止まらない。
一応小声だが。

「ごめんごめん。でも税理士って予想外だったもの。
へー蘭が税理士ねー…。お母さんは弁護士でしょ？
法学ならそっちのほうかなって思ったんだけど」

「私も最初そうだったのよ。でももしお母さんがお父さんとよりを
戻したら
探偵と弁護士が同じ建物で仕事することもありえるじゃない。
だったら2人を会計の面からサポートできる税理士もありかなって」

「ほへーっ…」

感心したように息を吐くと園子は乗り出していた体を再び椅子に
座らせた。

「なんか、あんたらしいわ。そういう考え方」

「そう？」

前に出ようとはしないけど、かといってひたすら後ろに控えてい
るわけでもない。
前に出る人を横から支える。

それが蘭という少女の生き方だと園子は思っている。

だからこそ税理士を選びたいのだろう。

親の仕事に敬意を払いつつ、並んでサポートできる職業であることに違いない。

「しかし嘛ー、探偵と弁護士と税理士がいる建物っていうのもなんだかすごいわね」

名前は毛利総合事務所とか？

と付け足す。

確かにこの3つの職業が揃えば人生の悩みがなんでも解決できそうな気がする。

「あはは、でもまだ目指すって決まったわけじゃないのに」

「いや、あんたはなる。この私が保証するわ」

「うーん…じゃあ園子はどうなのよ？やっぱりAO入試で経済学部狙い？」

今度は逆に蘭から問い始めた。

「あー多分それでいくと思う。人間誰でも長所を生かさなきゃね！」

ここでは言っていないが、園子の目指す大学が名門なのも蘭は知っている。

そこにAO入試で経済学部。

これは園子は小論文がずば抜けて出来るおかげである。

この前の全国模試小論文でも上位に入っていたほどに。

ちなみに最近練習として自分で書いている論文は

『スポーツ選手とスポンサーの収益から見るナッシュ均衡と今後の期待収益』、らしい。

見るからに小難しそうな題だが、視点を変えれば

『スポーツ選手』は京極真で『スポンサー』は園子のいる鈴木財閥と捉えられる。

つまり、未来のダンナ（暫定）を如何にして奥様である園子がバックアップしていくかをこの論文でつらつらと書いているわけだ。

流石は愛に生きる女である。

「長所といえば、和葉ちゃんもそうだよな。薬学に詳しいから」

「え？そうなの？」

「うん。私も最近知ったんだけど、和葉ちゃんってすごく薬に詳しいのよ。」

だからどこか良いところの薬学部目指すってこの前電話で聞いたわ」

「へえー……あの和葉ちゃんがねえ。てっきり文系かと思ってた」

「私もそうよ。でもよくよく聞いてると、化学なら服部君より上なんだって」

「うっそお！あの全国模試10番台の服部君より上なの！？」

一週間ほど前、和葉と電話した蘭は季節柄、進路のことを彼女に聞いたみた。

すると意外とあっさり返ってきた答えは「薬学部」。
理由を聞くと、

「私、ちよつと研究してみたい薬があるねん」

と電話越しにもわかる強い信念の元そう言った。

よくわからなかったが、相当薬学を熱望していることはわかる。
彼女ならきつと目標に向かって突き進むだろう。

そんな想定外の背景に園子はもう一度感嘆する。

「皆色々あるのね。それであんたのダンナはどうなの？
ぎりぎり出席日数はいけるみたいだけど」

「だからダンナじゃないって！……まあ、進路のことはアイツもそれなりに考えてるんじゃないかしら。大学は違うけど、同じ法学狙いみたいだし。確か服部君も同じだったはずよ」

意外と真面目に模試を受ける平次とは違い、のらりくらりと学校生活を送る

新一も一応探偵としての素質を高めるために法学へ行きたいらしい。まああの2人ならどこを狙ってもどうにかなるだろう。

「やっぱりあの天才達は本格的に探偵になるのかしら」

「さあ……。服部君は探偵でも警察でもないような感じだったけど、新一は今のところそうだと思う」

「ある意味あの男も昔からのポリシー貫いてるわね」

「ホント。呆れるっていうより感心するくらい」

それに比べて自分はどうか。

蘭は我がままでも信念を貫き通す新一を見るたびに思う。

文学と法学に迷い、復縁する可能性が100%とは言えない親の職業を支えるために

税理士も視野に入れる。

どうも中途半端な気がした。

先ほど言われた言葉通り、今の時期なら上の目指してもいいのだがそう思うとどうもためらいが出てきてしまう。

後ろから背中を引っ張られているような感覚に陥る。

一歩が踏み出せないのだ。

そんな中ふと箸の進む手が止まり視線を下に降ろす彼女を見て園子が

おや、と気がつく。

あの蘭が迷っていることに。

彼女だつて迷うことはいくらでもあるが、いつもと少し様子が違う。

そう感じ取れた。

原因は恐らく今の話題。

あんなならなれると言ったのにあまり嬉しく無さそうな顔をしたのを彼女は見逃していない。

暫く考えた後、わざと明るい声を出す。

「ま、私は私、あんたはあんた、新一君は新一君。人それぞれいろんな考え方があるよ」

「え？」

「沢山考えることはいいいことよ。一番ダメなのは何も考えないこと。何も考えないまま周囲に流されるなってママに言われたことあるわ」

「園子……」

大財閥の奥方受け入りの言葉は、蘭の迷いを肯定してくれる。

「ま、とにかく考えるだけ考えたらいいいじゃん。

……ほら早くお弁当食べなさいよ。箸止まってるわよ」

「……うん」

いくらかいつもの元気な笑顔を見せた蘭はそれ以上長いことは言わず、

ただ一言「ありがとう」と付け足しご飯を再び食べ始めた。

それに満足するかのよう^に園子もにっこり笑うと残りのジュースを一気飲みする。

そして空になったそれを近くのゴミ箱に投げ入れた。

——ナイスシュート

心のガツツポーズと、窓から聞こえるグラウンドからのサッカー部の
掛け声が
偶然交錯した。

4、ミライヨソウス（後書き）

最後の園子のゴミ箱へのシュートは願掛けです。
これが入れば蘭は希望を持って大学へ進むという願掛け。
とりあえずやるだけやってみることが大事。
受験生の皆様、がんばってください。

5、振り上げた拳はどこへ行く

真冬のある日曜日。

昼過ぎに平次の家遊びに行くと、彼が庭でぼんやりと縁側に座っていた。

視線の先にあるのは愛車のバイク。

「どうしたん？ぼーっとして」

「…なんや、和葉か」

いつもなら声をかけなくてもすぐ気がつくのに、

今回はそこでやっと存在に気付いた。

不審に思いながらもバイクに近づく。

よくよく見てみると、後方の車輪の辺りが広い範囲にわたって傷がついていた。

かすり傷だが、ここまで幅が広いと個人で直しにくいはず。

「もしかしてバイクで平次こけたん!？」

広範囲の傷と今の彼の元気の無さを考えて至った原因としてはそれが一番妥当だ。

しかし彼は彼女の問いを一蹴する。

「アホか。俺がそないどんくさいことするかいな。
バイクがこかされただけや」

「こかされたって…誰に？」

「その辺の子供や。くど…やなくて、コナンくらいのボウズが蹴った
ボールが公園入り口に停めてあった俺のバイクにぶつかったんや」

「……それはまた災難やったなあ」

恐らく公園で遊んでいた小学生のサッカーボールが、運悪く
入り口付近に停めたバイクに当たって盛大に倒してしまったのだろ
う。

だが愛車といえども、子供に怒鳴りつけるほど平次は心が狭くない。
それくらいの度量はある。

「直せるん？」

「ここまで傷ついたら自分では無理やな。サイドミラーもちよお曲
がっとするし
修理に出さんと」

また小遣い減るわ、と彼はため息をついた。
下手すれば2桁の修理費が要るかもしれないのだ。
普通の高校生に比べれば貯金はあるとはいえそれはきつい。

「お祖父さんに頼んだら？」

「いや、このバイクその爺ちゃんに買ってもらたもんやし言いにくいわ」

「そっか…」

「このバイクにはいつも悪いことしてるわ。ホンマ頭が上がらん」

お金が要ることより、傷をつけた罪悪感のほうで勝っているに違いない。

彼がいつもこのバイクを念入りに磨いていることを彼女は知っている。

「でも、ボールが当たったことに関してはそこまで腹立ってなさそうやけど？」

「そないなことない」

平次は即答するが顔はこちらを見ない。
意地を張っている証拠だ。

ボールは当たらなかつたらそのまま公園の外に転がっていたことだろう。

そうすれば蹴った子供が道路に出るのは当然のこと。
それが入り口付近にあった彼のバイクのおかげで

道路まで出ることはなかったのだ。

子供が事故に遭う可能性は無くなったということである。

だから平次はバイクに当たったことをそこまで怒っていない。
むしろ当たって良かったと思ってる。

でもバイクを傷つけた事実はどうにもならない。

子供が助かった幸運とバイクの不運を同時に味わってしまい
どうにもならない感情を持て余しているのだ。

そしてそんな気持ちを悟られまいと彼は意地を張っていた。

「ホンマ、不器用やなアンタも」

彼女は苦笑してバイクの側から縁側に座る彼の隣へ移る。

全て見通されていることをわかって気まずそうに平次はぶいと顔を
そらした。

「私も少しくらい修理費出してあげるわ。いつも乗せてもらてる乗
車賃がわりや」

「別に俺の意思でお前を乗せてるんやし、いらん。自分でどうにか
するわ」

言外に自分が乗せたいから乗せていると言っているようなものだ。
彼はそれを自覚して言っているのだろうか。

——多分気付いてへんのやろうなあ

無自覚での発言は彼女の心をかき乱す。

少し顔が赤くなるのを感じながら、座っている彼の頭をぼんぼんと叩いた。

まるで姉がすねた弟を宥めるように。

5、振り上げた拳はどこへ行く（後書き）

短めのほのぼの平和を一発。

こういったお姉ちゃんな和葉と弟な平次は結構好きです。

なんてったって彼女は「自称・平次のお姉さん」ですから。（笑）

最近コメントへのレスが遅くなってますいません；

必ず返信させていただくので、少々お待ちください。

6、belong

「国体3日目において、空手女子の部は毛利（帝丹）が準優勝。剣道男子の部では服部（改方）と沖田（泉新）が決勝進出。練習試合を含め数々の名勝負を生み出した2人が最後の試合に挑む。尚、4日目からは合気道の準々決勝が始まり、注目の対決は女子の部遠山（改方）と――」

新聞のスポーツ欄をめくり見知った名前と顔を見つける。

空手で準優勝した少女はその美しい顔立ちからか、優勝した者より写真が若干

大きく扱われているように思えた。

更に剣道では決勝で戦う2人がどちらも正統派美形のため、どうやら取材陣が懇願して

同じフレームに入らされたようである。

笑っているが心の底では嫌がっている風な2人に思わずくすりとした。

「何見てるの？哀ちゃん」

元太や光彦とゲームをしていた歩美が、一人離れて新聞を読んでいた哀の側まで来る。

ちなみに博士は今地下の研究室で実験中だ。

「国体の記事よ。あなたも知っている人が載っているわ」

「あ、ホントだー!!」

自分の知り合いが新聞に載るということに歓声を上げながらその写真に釘付けになる。

「そういえばコナン君も蘭お姉さんの応援に行っただよね。」

確か園子お姉さんっていう人も行ったはずだよ」

「へえ、そうなの」

蘭が決勝進出が決定した時点で、親ばかの父・小五郎は大会場所まで

はるばる飛んでってしまった。

これに関してはコナンも素直について行ったらしい。

親子ではない2人が必死に応援する姿を想像するとなんだかほほえましい。

一方園子は決勝進出以前に既に大会場所には行っていた。

テニス部に所属する彼女はそちらの応援で初日からいるのである。

「でも新聞に載るなんてすごいなあ。歩美も早くクラブ活動してみたい」

部活動をするだけで記事に載るわけではないが、少女にとってク

ラブは

一種の憧れみたいなものがあるのだろう。

目を輝かせていつかクラブ活動することに夢を馳せた。
そんな姿に哀は珍しく興味を示す。

「あら、どんなクラブに入りたいの？」

「えーとね、お外で出来るやつがいいな！いっぱい楽しく動くの！」

帝丹中学にはグラウンドを使用したクラブ活動はたくさんある。
どれにするかは迷うが、とにかく太陽の下で動きたいようだ。

「スポーツ系ね」

「うん！じゃあ、哀ちゃんは何に入るの？」

「…え？」

「だって哀ちゃんも歩美と一緒に帝丹中学校行くでしょ？」

少女の純粋な問いに哀は思わず目が泳ぐ。

帝丹小を経て中学へ進学。それはごく当たり前の考えであるが
彼女にとってはそうはいかない。

己のバックグラウンドにある様々な事情が頭をよぎり、少しだけ
相槌を打つ声がかすれた。

「そう、ね……」

「やっぱり哀ちゃんはお部屋でするクラブのほうがいいのかなあ？
化学部とかコンピューター部とか色々あるよ」

何も知らない少女は興味津々で問い直す。

いつも地下室で籠っている様子を思い出してインドアな部を想像したのだろう。

先輩から聞いたと思われる名称を並べていった。

「……帰宅部はあるのかしら」

「それはあるけどダメ！せっかく色んなクラブがあるんだから楽しもうよ！」

唯一の逃げ道を提案したが、それはあっさり却下される。
一応存在する帰宅部は歩美にとってありえないことなのだ。
皆と一緒に活動することが当然と考えている。

正反対な価値観を目の前にして哀は苦笑した。

さてどうしたものかと考えを張り巡らす。

その場凌ぎに適当な答えは言えるがそれはしたくない。

ましてこの少女には絶対に。

ならできることは一つのみ。

「……考えたことないからすぐには答えられないわ。」

あまりそういうことに関心を示さないのよ」

「ごめんなさいね。」

そう言って困った顔で謝った。

「ええー……」

膨れっ面になるか、がっかりするか。

どちらかにさせてしまうだろうと思ったが、暫く考え込んだ歩美は次にはつらつな提案を挙げることになる。

「じゃあ歩美と一緒に入ろうよ！テニスとかラクロスとかバレーとか、何でもいいから一緒に入る！」

あの超夜型インドア派の哀にスポーツ系を勧めたのだ。しかも同じ部で。

「…あなたと私がスポーツを？」

「うん！だって決まってるじゃないでしょ？同じクラブならずっと一緒にいられるし」

絶対いいよ」

同じ小学校を出て同じ中学に入り、同じクラブに入る。それは哀がかって体験したことのない「共有」だ。

「ね、いいでしょ、いいでしょ！」

——一体どういうものなのだろう

予想しようにも全く検討がつかなかったが、悪い気はしなかった。

そして、

「…そうね、考えておくわ」

「やったあ！じゃあ楽しみにしているね！！」

やっと満足する答えを聞きだすことの出来た少女は嬉しそうにゲームをしている2人の少年のところに戻っていった。恐らく彼らの志望クラブも聞きに行ったのだろう。

そんな3人の集まる様子を眺めながら哀はもう一度「先」のことを考えてみた。

3人を見ていると今度は自然と想像することができた。

小学校を卒業した2人がセーラー服を着て、スポーツバッグを担ぎながら共に登校する。

今日の体育は何だろう、数学の宿題はできたのか、そういったとりとめもない会話が交わされている。

宿題のアドバイスをするのは、隣で歩いている光彦。

彼はやはり文系の部活動なのだろう。

その後ろを追いかけるように寝坊した元太がサッカーボールを手に走ってきて、

光彦が彼を注意しながらも笑う。

更に歩美や自分もそんなやり取りに笑いあう。

そして、4人で校門をくぐり抜け――…

もう一人の少年をそこに見ることはできなかったが、それでもその光景は

素晴らしく自分を幸福にさせるのではないかと彼女は思った。

7、突風少女

生暖かい突風が全身を打ち付けて思わず園子は目をつぶる。少し雨も降っているが、傘を差せばのけぞること請け合いだ。彼女を守るべく「彼」は大きな体を盾にするように風向きへと歩く側を変えた。

「大丈夫ですか？園子さん」

「あ、うん。ありがとう真さん」

目をぎゅつと瞑りながらも風向き側へ周った京極に礼を言う。見えない視界で進んでいくため、彼にぴったりと付き添った。これで瞑っていても安心して歩くことが出来る。

くつつかれた彼は少し顔を紅くしたが、世の男性がこのような場合
するであろう

肩を抱くという行為をすることは出来なかった。

しかしその代わり、合わさった腕から離れることはない。

「こんな日」でも硬派な彼はここまでしか出来ないらしい。

今日は2月14日。世間はバレンタインデーである。

そして園子はそういったイベントが大好きな少女だ。

日本の空手大会に出場するため帰国していた恋人に会わないわけがない。

例え雨を伴う春一番が吹いたとしても。

大会を終え観戦していた彼女は京極と共に試合会場を後にし、タクシー乗り場まで歩いていった。

会場から乗り場まで数分だけだが、例年より早い春一番は2人の足を遅くさせている。

「春一番は名前は何となく良い響きですけど、実際これだけ吹かれては困りますね」

風でずれた眼鏡をかけ直しながら彼が言う。
レンズが小雨で水滴をつけていた。

話しかけられた彼女はうつすら眼を開け彼を見上げる。

風はまだ彼らを後方へ押しやろつとしていた。

「……でも春一番って元々あまり良い意味では無いって知ってた？」

「そうなんですか？」

意外そうに問い返す。

これは学問にも手を抜かない彼でも初耳だった。

恐らく雑学関連に当たるのだろう。

「この前現代文の授業で習ったんだけどね。春一番という言葉が生まれたのは江戸時代。

壱岐の漁船が2月13日突風で遭難して53人の人が亡くなったん

だつて。

それ以来春先の強い南風を春一番と呼んだそうよ」

思い出すように空を見上げながら彼女は述べた。

日にちを含め淀みなく話すことから、強く記憶に残っていることが伺える。

「…それは知らなかったですね。この風が多くの方が命を奪ったとは」

「私も教えてもらった時びっくりしたわ。蘭なんかすごく悲しそうな顔するんだもの。」

それに比べたら私はへえ〜って思うぐらいだったけどね」

あの子ほど感受性豊かじゃないのよ、と苦笑してから自分の盾になつてくれている

彼のコートに雨でへばりついた落ち葉を払う。

宿り木を失った葉は後方へと攫われて行くかと思われたが、風が一瞬止んだので

そのままひらりとアスファルトの上に落ちた。

彼女達の棚引いていたコートもやっとな垂れ下がる。

「自分はこれから春一番と聞くとその由来を思い出してしまいそうですよ」

「…真さんは優しいよね。でも私はこの由来ともう一つ思い出すこ

とがあるの」

「何ですか？」

彼女はふふつと笑った。

風の音がなくなった並木道で目をつぶり再び天を仰ぐ。
そして徐に口ずさみ始めた。

——命短かし 恋せよ乙女

赤きくちびる あせぬまに

熱き血潮の 冷えぬまに

明日の月日は ないものを……

「……ゴンドラの唄、ですか？」

「あ、真さんこの唄知ってたんだ」

中々の歌声と共に披露された唄に彼は聞き覚えがあった。
ゴンドラの唄。

それは大正時代に流行した劇中歌である。

「命短し恋せよ乙女」だけが今世の中に出回っている感があるが
本来は劇中に歌われた曲の歌詞の一部なのだ。

音楽の授業の一環で習ったことを覚えていた京極は
唄の名前を言い当てることが出来た。

「確か黒澤監督の映画でも使われましたよね」

「へえ、真さんそういうことも知ってるんだ。私は歌詞が今まで吹
いていた風と

似ているようで覚えてるの」

「春一番とゴンドラの唄がですか？」

「ええ。なんとなく雰囲気似ているわ」

春先の突風と大正の流行歌を結びつける要素を見つけられず京極
は首をかしげた。

「春の一番最初にしか名付けられない突風と女の子のその瞬間にし
か無い感情が
似ているように思えるの」

「なるほど……」

彼女らしい考え方だ。

悲痛な色を含んだ風と乙女の心を重ねる辺りに彼女の理想と夢が詰まっている。

しかしそこまで考えて、彼は少し引つかかるものを感じた。

「では、園子さんはその唄に共感をするのですか？」

「うん。そういうことになるわよね」

「……すると命短しとは……」

大真面目な顔で京極は側にいる園子を見下ろした。

一瞬の間。

その意図を悟った彼女はぱっと輝くような笑顔を見せて声を立てて笑った。

「あはは、それで真さん怖い顔してたのね。

あれは少女の命が短いんじゃないかって人間の一生が短いってことよ。

それに、私は長生きする気満々だし何かあっても真さんがいるから大丈夫！」

彼女の天真爛漫な笑顔とともに発せられた言葉に今度は一瞬息を止める。

一生をあなたと共に、とも受け止められる発言だったのだから。

彼の心のうちはいざ知らず、風の止んだ並木道から見えたタクシー乗り場まで

園子が小走りに足を進め始める。

そんな背中を呆然と見て京極はふっと笑った。

——春一番というより春爛漫ですね

花が咲くような明るい表情で彼女は再びあの唄の続きを口ずさむ。
両手を広げてくるりと回りながら。

彼が先ほど心配してくれたのが嬉しかったのだろう。

人通りは少ないとはいえ、視線を気にせず彼女は唄う。

——いのちみじかし 恋せよおとめ

黒髪のいろ あせぬまに

心のほのお 消えぬ間に

きょうはふたたび 来ぬものを……

7、突風少女（後書き）

初・京園です。結構今回のネタは自分でも気に入ってます。

春一番の由来は昨日の日本経。新聞から・・・（笑）

それにしても、春一番が吹く頃まで続けると言っていたらもう吹き
ましたね。

この連載どうするんだと一瞬思いました。（笑）でもまだ暫くは続
けますv

8、白と黒の奇妙な符合

ある晩春の昼下がり。

快斗は都内の某近辺を自然な足取りで歩いていた。

「仕事」の下見である。

狙いは私立美術館。

前日ではなく数日前に下見することで自分の痕跡を最小限にしようとしていた。

カモフラージュのために右手には今朝のスポーツ新聞。

見出しには最近起こった研究所の爆発事故のテロ説や浮浪者の放火説などが踊っている。

どれも信憑性の薄いものばかりだが、警察が「ただの火事」と発表しているので

勝手に考察するしかないようだ。

休日ということもあり、美術館前の大きな広場には多数の人がいた。

だがその中に一際目を引く男を見つける。

すらりと伸びた背に上等そうなブラウンのコート。

そして何より、その手に携えた大きな花束。

他の人間なら不釣り合いであろうそれが嫌味なくらい似合っている。

快斗が思わず顔を引きつらせ逃げようとしたときは既に遅かった。向こうの彼もこちらに気付き爽やかな笑顔を投げかけてくる。

「やあ、こんなところで奇遇だね」

「……おう」

白馬は快斗の若干不機嫌そうな声を無視して互いの距離が2mくらいのところまで立ち止まった。恐らくこれが彼らの位置なのだ。

「帰国していたことは別にいいけど、何なんだそのでっけー花束は？」

苦手な彼の前から早く立ち去りたいのは山々だったが、それ以上に気にかかることが会話を続行させる。問われた彼は本当に今気付いたような仕草で自分の手元を見た。

「ああこれかい？僕の友人が入院しているから、その見舞いの花だよ」

「いつも運転手と付き人がいるお前が徒歩で行くのか？」

「実は今回戻ってきたのは裁判の証人としての手続き等が目的で、友人が入院していると聞いたのは帰国した今朝のことだったんだよ。空港から直接ばあやの車で直接病院に行ってね。」

「そこではあやには帰ってもらい僕だけで見舞ったのさ」

「へえ、直接行くなんて随分仲の良い友達なんだな」

「親友だからね」

さらりとその2文字を口にする彼に快斗はおや、と心の中で気付いたことがあった。

以前会った時よりもどこか穏やかというか、飾らなくなったというか。

それは外見ではない。

中身が自然体のように見える。

快斗自身これまでも色々なことがあったが、彼も何かあったのかも
しれない。

「お前がそんなこと言うなんて珍しいな。それに、直行で病院行つたせいで

買えなかった見舞いの品の代わりなんだろう、その花束」

「そうだね。院内の花屋では彼に合う花が無かったから、看護士にこの近辺の

花屋を教えてもらったんだよ」

「それはごく丁寧なことで」

見舞いの花を選び抜く男というものも何だか変な話だ。

白馬らしいといえはらしいのだが。

このまま長話するほどの仲でも無いので、快斗は「それじゃ、その親友さんによろしく」

と適当に挨拶して通り過ぎる。

向かい合って2mだった距離が、背中同士で再び2mになりかける。だがそれ以上の距離になるのを彼の言葉が止めた。

「黒羽君、君と同じマジシャンであるキッドは宝石を狙ってるんだっただね」

「……何だよ今更」

まさかこの美術館を狙っていることがばれたのかと一瞬ぎくりとするが、まだ予告状は出していない。

しかしこの探偵とは痛み分けをしているのでどんな手で自分をキッドと証明してくるかわからない。

快斗は心の揺れを押し込め、努めて冷静に問い返す。

「ビッグジュエルには、犯罪を犯してまで欲するようなものがあるのかな」

「……さあ、俺に聞かれも知らねーな」

彼の顔を観察してみると、どうやらそういうわけでもないようだ。かと言って何の意図も無く問いかけてるようにも見えない。

「ああ、そうだったね。君に聞いても答えが返って来る筈ないな」

当たり障りの無い返事に彼は苦笑する。

そこに違和感を覚えた。

今までの彼なら「そんなことはないと思うけどね」と切り返すはずだ。

今日の彼はどこか違う。

「何かあったのか？もしかしてその裁判か？それとも友達のほうか？」

会話の中から引き出された出来事を挙げてみる。

好敵手の珍しい様子への好奇心ではない。

ただ気になったのだ。

あれほどまで自信に溢れた男が、こんな顔をするとは思わなかったから。

一方の白馬も快斗にそこを言及されるとは予想していなかったようで少し驚いた表情をした。

そして、

「両方、……かな。人はどういう気持ちで犯罪を犯すんだろうね。彼らを見ていると本当にわからなくなる」

とても寂しげな顔を見せた。

どこか遠い所に思いを遣るような目で。

快斗は言葉に詰まる。

それは言わなかったのか言えなかったのか。

キッドとして白を纏う時、犯罪を犯している自覚が無いとは断言できない。

それでもやらねばならぬことがある。

その複雑な気持ちは快斗自身あまり考えたくは無かった。

だから「彼ら」が一体誰を指すのかわからないが、少なくとも白馬の価値観を大きく揺るがしたのではないかということとは

察することが出来た。

犯罪を犯した者自身が自覚したくない心を彼は垣間見てしまったのかもしれない。

「その気持ちを味わおうとは思わないけど、知りたいとは思っね」

「だから最後に聞くのか？動機を」

——なぜ、こんなことを？

彼は犯人を特定する時そう聞く。
どんな犯罪者にも、必ず。

「かもしれないね。キッドにもいつか聞いてみたいものだ」

「ふうん」

味気ない言葉を返し、快斗は白馬の持つ花束に目を遣る。
それには、華やかな色合いの中にどこか繊細な雰囲気があった。
まるで彼を表すかのような。

——まずい

思考回路に警告が瞬間的に発せられる。
このままでは彼に「引っ張られて」素の自分が出てしまう。

「お前、病院に戻る途中だろ？早く行かなくていいのか？」

警告に従いすぐに別れる糸口を探し出す。
幸い彼も素直にそれに応じてくれた。

「ああ、そうだった。変な話をして申し訳ない。君はこれからどこかへ行くのかい」

「いや帰るだけだよ」

頭に叩き込んだこの近辺の地理をまとめるために帰るのだが。

「そうか。……そういえば、まだ桜が咲いてるところがあるみたいだね。」

今年の日本は暖かったようだ」

「まあ、そうだな。あんま興味無えけど」

早くここから去りたい。

そんな願いに反して彼は一言付け足した。

「君もたまには上を見てみるといい。下ばかり見ていると見えるものも見えなくなる」

「え？」

快斗が聞く間もなく彼は踵を返す。

そして「ではまた」と言い残し行ってしまった。

去り際の言葉が謎めいていたので、少しだけその意図を考えてみたが

全く見当がつかない。

再び一人となり考え込む快斗の側で群れていた白い鳩の一羽が忙しない音と共に飛び立った。

それにつられて見上げる。

桜は無かったが空が目に見え飛び込んできた。

「上、ねえ…」

彼の言葉を思い出し、こんな自分にも見えるものはあるのだろうかと思ふ。

前向きという意味での「上」なら見える自信はある。

だがそれ以外の「上」を指すなら、それはわからない。

一体彼は何の「上」を指したというのだ。

それに気付かない時点でもう見えてないことになるのか。

どれだけ目を凝らして見つめても変わることの無い空に向かって
快斗は雁字搦めの心を差し出した。

それでも、薄紅色の桜は白き罪人の上にも舞い落ちるのだ。

8、白と黒の奇妙な符合（後書き）

tea timeからカウントダウン、そしてそこから1週間ほど経った日の出来事です。

白馬も「彼」に会って、詳しくは聞かずとも何か思うところがあったのかもしれませんが。

9、完全犯罪（前書き）

故意的に具体的な描写をしていません。
わからない方はそのままお願いします。
（苦笑）

9、完全犯罪

「犯人は、あなたですね」

町の雑踏とは一線を画した、クラシックの流れる喫茶店の片隅のボックス席で新一は告げる。

殺人のトリックと状況証拠を突きつけた上で。

痛いほど落ち着いた空気の中言われた相手の男は苦笑した。

「それはあなたの推理ですか？」

「そうですね。厳密に言えば彼と電話で話し合った結果あなただと断定したわけですが」

一昨日大阪で起こった殺人事件。

殺害されたのは大学院教授。

容疑者の筆頭候補はその教授のゼミ生である女だった。

一方、同じくその教授のゼミ生の青年が東京に来たのは正午過ぎ。

そして喫茶店に入り何か飲み物でも飲もうとしたところ、新一が来たのだ。

鋭い視線をこちらに向けて。

「しかし警察は僕を容疑者にも挙げてませんでしたよね」

「……確かにあなたにはあの教授を殺す理由が無かった。でも状況があなたを犯人だと言っていると服部が俺に伝えてきました。」

そして東京にあなたが向かっているとも」

「ああ、あの少年ですか。じっくり現場を見ていたから何かあるなとは思ってたけど」

青年は他人事のように呟くと目の前に置かれた紅茶を一口飲む。

「では君はどうして僕があの人を殺したと思いますか？」

「……被害者があの容疑者の女性と付き合っていたことはわかっています。」

そしてその女性は以前あなたと付き合っていた」

普通ならそこで彼女を「取られた」とでも思った青年が教授を殺したと考えるだろう。

しかし、

「あなたと女性の間揉め事のようなものは無く、お互いがすんなりと了承した上で別れた。しかも別れたのは1年以上も前のことだ。」

これは他のゼミ生が証言しています」

別れて1年以上経ち、未練も何も無い元恋人の相手を恨む理由がないのだ。

だから最初から警察も彼を容疑者から外していた。

「それに、浮気をされた女性の場合男を恨むのではなく取った女を恨み、

男の場合は浮気をした女を恨むといえます。

これはただの確立の問題ですが、それも踏まえあなたが教授を殺す動機がわからない」

男女の独占欲の行き先。

新一にはそれがまだいまいち理解しきれないところであるが、以前母親がそう言っていた。

青年の返事を待つように彼は後ろの背もたれに体を預ける。

そこから暫く沈黙が流れた。

クラシックだけが周りを包み込む。

そしてやっと口を開いたのは、持っていたグラスをテーブルに置いた青年で。

「では一つ教えてあげよう。君が言ったとおり彼女とは完全に縁が切れている。ただの友人だ。

……それに、男は浮気をした相手を恨むという説は当たっているよ」

カラン、と紅茶の中の氷が音を立てて崩れる。
新一の彼を見る目が一瞬揺らいたが次に息を吐いた。
やられた、といった感じた。

「そうでしたか。……つまり、彼女と別れた後あなたは――」

「まあその辺にしておこうじゃないか。僕は出頭しても絶対に動機は言わない」

青年の話し方が少し変わった。
恐らくこれが本来の姿なのだろう。

「ではなぜ僕には教えてくれたのですか？」

「それは野暮というものだよ東の名探偵君。
ああ、しかし西の彼でも教えたかもね。
そういえばここに来るんだっけ？彼」

確かに西の名探偵は新一に彼を捕まえるよう頼んだ後
すぐこちらに向かっているはずだ。
だが新一が彼の言葉に眉をしかめる。

「今は流しますけど、そういう冗談をあいつの前でも言えば僕が怒りますよ」

「それは失礼」

静かだが警告じみた言葉に青年は肩をすくめた。
新一もため息をつき、席と隣接した大きな窓ガラスから外を垣間見る。

まだ待ち人は来ないようだ。

そして再び顔の向きを戻しまだ残っている疑問を投げかける。

「そういえば、あなたはなぜ東京に来たのですか？」

西の彼は青年が逃亡し自殺するのではと危ぶみ新一に搜索を頼んだのだが。

その予想に反して新一がここに来た時の青年を見る限りそうとは思えなかった。

「さあ……なぜだろう？僕はあの人に出会ってから追いかけてばかりいたからね。

たまには追いかけられたかったのかもしれない」

そう言って寂しそうな顔つきをする。

「だから、ここに来た事もあの人を殺したことも後悔はしていない。
そして君には話したけど法廷で動機を明らかするつもりもない」

動機を明かしたほうが刑は軽くなるはずだが。
新一は黙って彼の紡ぐ言葉を受け入れる。

「僕にとってこの殺しは完全犯罪なんだよ」

そこで青年はもう一度グラスを手に取り口に含んだ。

まだ新一は何も言わない。

いや、言う気がしなかったのだ。

彼がそれで満足しているならそれでもいいかと。

動機を明らかにしないことは被害者側の親族にとっては苦痛かもしれないが、

恐らくあの教授にも非はあったのではないだろうか。

それで殺しが肯定されるわけではないけれど、

うつすらと動機を話した目の前の男を見るとそう思わざるを得なかった。

加害者なのに被害者のような傷ついた目をしているのだから。

幾分衰れんだ視線を青年に送る。

視線の先で彼はじっとグラスの中の氷を見つめていた。

氷がとけて紅茶の色と混じっていくのを。

トリックを暴いても、動機を知っても、彼は完全犯罪だと言う。

——一体何がこの犯罪を完全にしたというのだ

真実を解き明かしても尚、完全な犯罪に新一は頭を縛られる。

それから西の彼がパトカーのサイレンと共に
息を切らして訪れるのはもうすぐだった。

10、Flavor of Love

「みんなの好きな香りを来週先生に教えてくださいね」

1年B組の担任、小林澄子から「生活」の授業で出された宿題は光彦にとって

算数よりも国語よりも難しいものだった。

小林教諭は何も作文にしろとは言っていない。

渡された紙に好きな香りとその理由を2、3行ほど書いたらいい話である。

元太は例によって「うな重の匂い」だったし、歩美は「ケーキの上に乗っている苺の香り」

だと下校途中で聞いている。

理由もシンプルに「好きな食べ物」で済む。

コナンは「レモンの香り」だったがそれは好きな食べ物というのは若干違っらしく、

「作ってもらう食べ物の中で一番好きだから」だそうだ。

三者三様だが、一方特別好物の無いこの少年にはそれが難題だったのだ。

理論的な彼は「何となく」という理由は書きたくなかった。

宿題を出されたのは金曜日。

来週の月曜までの2日間で考えなくてはと光彦は頭を抱えたのである。

「うわーっすごいきれいな桜だー！」

「ほんとでけえなー！」

歩美と元太の歓声が空に向かって飛ばされる。

結局土曜は答えが思いつかず、光彦は日曜にコナンや哀も含めた少年探偵団と

付き添いの蘭、そして偶々事務所を訪ねていた平次や和葉と近所の公園に花見に来ていた。

他にも花見客は多くにぎわっている。

公園の広場に桜並木が出来ているので、一本空いていた木を選んでそこにビニールシートを敷き、持ち寄ったお弁当を開けていった。

用意を済ませ総勢8名で円になって重箱を突く。

主に元太が箸をどんどん重箱に向かって進ませていくのを

歩美が笑いながらもたしなめ、みんながそれを見て更に笑いあった。一通り食べ終わると今度はデザートである。

蘭と和葉は紙袋から林檎や梨を取り出した。

花見は急に決まったので、まだ果物は切られていない。

「ほな、切る前に洗いに行つたるか。その辺に蛇口があつたはずや」

「うん、お願いするわ」

平次が立ち上がり、和葉から果物を受け取る。
それを見ていた光彦も立ち上がる。

「僕もご一緒していいですか？」

「？ああ、ええで」

突然の申し出に疑問を抱きながらも平次は快諾した。

光彦が林檎を2個、平次が梨を4つ持って洗い場まで向かう。

その道すがら光彦は同行の目的である香りについて聞いてみることにした。

わからないことがあれば、年上に聞け。

親からそう教わっているからである。

「あの、一つお聞きしてもいいでしょうか」

「なんや、一緒に来た理由はそれかいな」

「…すみません」

「別に謝ることちゃうて！それで何や？何でもこの兄ちゃんに聞いたらええでー」

にかつと笑い光彦に促す。

それにほつと安心して思い切つて質問してみた。

「実は、学校で好きな香りを答える宿題が出たんです。でも僕そういう目で見えないものを考えるのは苦手で…だから、参考がてらに平次お兄さんの好きな香りを教えてくれませんか？」

香りやてー？、と彼は聞かれた言葉を繰り返した。

小さな子供は大真面目な顔で見つめている。

そのため彼も暫く唸りながら考え込んだ。

「そっやなあ……」

いつの間にか洗い場に着き、光彦は不安そうに彼のほうを見る。

すると平次は何気なく上を見上げ、次の瞬間思いついたように手をぱんと叩いた。

「桜、やな」

「桜に香りなんかあるんですか？」

「そらあるわ。うっすらやけどな、俺はええ匂いやと思うわ」

「じゃあ理由とかありますか？」

「んー……」

必死に聞いてくる少年に、彼は困ったような顔を見せる。
だがとりあえず思いつくままに答えた。

「心が洗われるっちゅうか、清々しくなるっちゅうか、寂しくなるっちゅうか、

……あー…晴れ晴れすんのかな。いやでも、どこか引つ張られてる感じもするし

かと言って無理やりな感じでもないしなあ。もしかしたら天晴れな感じだったりし」

「あ、もういいです。十分わかりました！」

何やらすごく長くなりそうだったので、慌てて止めに入る。

思いついた言葉をつらつら述べていた平次は「あ、そうか？」と現実に戻ったように拍子抜けしていた。

とにかく彼がすごく桜を好きなことはわかった。

しかし、少年の答を導き出す参考にはあまりならなかったようだ。

果物を洗い終わり、みんなのいるところへ戻った光彦は次に蘭と和葉に聞いてみることにする。

他の者達は向こうで紙製のブーメランを飛ばして遊んでいた。

それとは別にシートの上で談笑していた彼女達に、先ほど平次に問いかけた

内容をそのまま投げかける。

案の定、彼と同じように2人は唸ったが先に答えたのは和葉だった。

「洗い立ての真っ白なシーツの匂いかなあ。清潔な香りがするしちよつと薬っぱい、さっぱりとした感じが好きやわ」

「あ、それいいかも！私はこの林檎かな。真っ赤な色とかあつさりとしてちよつと甘い匂いが好きだな」

「なるほど…」

どちらも彼女達に似合う香りのように思えた。そつえば桜も平次に似合うかもしれない。

「ねえ、光彦君。あまり深く考え込むより、食べ物以外でも何でもいいから

好きなものを想像してみたらどうかしら？」

「好きなものですか？」

「ええ。例えばほら、本とか昆虫とか。食べ物以外なら光彦君いっぱい好きなこと

あるでしょ？そこから通じる香りを連想してみるのも一つの手よ」

ブーメランを飛ばした後は、蘭と和葉も加わりバレーボールをしている。

そこから少し離れた桜の木の下で光彦は、先ほど聞いた言葉を思い返した。

好きなことといえば、読書だ。
なら本の匂いはどうだろうか。

好きなほうかもしれないが、ぴんとはこなかった。
他に好きなもの、好きなもの……

「お悩み中のような」

迷宮入りしかけた時、突然頭上から声がした。

はっと見上げるとそこには茶髪の少女が立っている。

「あまり根をつめるとダメよ」

インドアな哀は輪の中には入らず、気まぐれでここに来たようだ。
「隣いいかしら」と聞かれ、少しだけ頬が赤くなるのを感じながら

座っている位置を横にずらす。

「あ、どうぞ。……あの、灰原さんは生活の宿題できましたか？」

「ああ、あれで迷っていたのね。私も少し悩んだけど、結局単純に思いついたもので決まったわ」

隣に座った彼女は地面に落ちている花びらを何気なく拾う。
一方若干緊張しながらも彼は何回目かの質問をした。

「何にしたのですか？」

「……トマト」

「え？」

思いがけない回答に目を丸くする。

ぼつりと「トマト」と言う彼女は視線を横にそらす。

自分でも変わった答えだと思っているのだろう。

少しだけ照れている感じがした。

表情からは伺えないが雰囲気がそんな感じだ。

珍しく感情を出した彼女に光彦はそのわけも聞こうとしたが、その前にふさがれる。

「理由は秘密よ」

彼女の先制に彼は出そうとしていた言葉を飲み込んだ。
どこからトマトが導き出されたのかわからなかったが
とりあえず答えはわかった。

——灰原さんはトマトというよりトマトから通じる何かが好きなの
かもしれません

そんな考えが頭に浮かぶ。

先ほど蘭も同じようなことを言っていた。

対する哀は手に取っていた桜を指から静かに離れた。

風に乗ってあつという間にどこかへと消え去っていく。

その花びらを彼も目で追うと空が見えた。

そしてその空には真昼に出る白くて丸いあるものがあつた。

うつすらだが確かにそれはある。

彼はなぜか吸い込まれるように見つめた。

そして瞬間はつとしてそれと哀を見比べる。

何度も何度も。

そして、

「そうか！わかりました！！」

「え？」

突然声を上げた光彦に驚いて彼女は横を向く。
顔を紅潮させて興奮気味だ。
いつも謎解きをした後に見せるような表情で。

「灰原さんのおかげです！ありがとうございます！！」

「？え、ええ……」

その日の夜、彼の宿題はめでたく完成することになる。
週明けの月曜日に彼も哀も小林教諭に提出した。
どちらの答えも教諭を微笑ましくさせるものであった。

「わたしはとまのかおりがきにいつています。
それはいっしょにすんでいるはかせが
いつもおいしそうにとまとジュースをのむからです」

「ぼくはおつきさまのにおいが好きです。

ほんとうににおいがするわけではないですけど、

ぼくがあこがれるひととおなじようなかおりがしそうだからです」

10、Flavor of Love（後書き）

少し長めで10話目を投稿。光＋哀です。

コナンの好きな香りの元ネタは言わずもがなでしょう。（笑）

蘭はなぜか林檎がイメージされました。あの赤さが似合うような気が。

そしてどこかしら色気と危うさがあるような。

ちなみに只今絶賛スランプ中で、文が乱れてるのは自覚してます（汗）

11、23時40分の恋人達

冷蔵庫から缶ビールを一本取り、濡れた頭をがしりとタオルで拭き

居間に戻ると少し開いていた引き出しから見慣れたものを見つけた。あまり他意はなく中から取り出し、折りたたんであるそれを開く。

「氏名・高木渉、階級・巡査部長、所属・警視庁……」

佐藤は中に証された身分をポツリと口に出して読む。

近年一新された警察手帳はまだ真新しかったが、写っている顔は数年前のものだ。

警視庁に配属される数年前のものだろう。

そんなことを思いながら腰を降ろしちゃぶ台に肘を乗せて、

その少し幼さの残る顔つきをまじまじと見つめてみる。

見れば見るほどそれは彼なのだが、でもどこか違和感を覚えた。年齢の差ではない。

「……ちよつと、尖つてる？」

佐藤が感じたのは目に見えるものではなくその写真が写し出す雰囲気だった。

今の彼からは感じない、少し尖ったオーラが出ている。誰でも写真を撮るときは緊張して顔がこわばるだろう。だが彼の場合はそういった緊張ではないように感じる。

そう、例えるならば少し他人と距離を置くような空気の――……

「あれ、何見てるんですか佐藤さん」

背後からこの部屋の主が声をかけてきた。

佐藤の後に風呂に入っていたのだ。

彼女が髪をろくに拭きもせず缶のプルタブも開けないまま
自分の警察手帳を真剣に見ている姿は何とも不思議なものだった
だろう。

彼の手にも缶ビールがあり、興味深そうに佐藤の隣に座る。

「んー、ちょっと珍しかったから見てただけ」

「珍しいって……佐藤さんだって同じもの持ってるじゃないですか」

「私が見てたのはあなたの写真よ」

そう答えると彼は目を丸くさせた。

そして缶を同じくテーブルに置き彼女の持つ自分の顔を覗きこんだ。

「どっか変わってます？」

そりゃまあ年は取りましたけど、と苦笑したが
佐藤が同じ笑みで返すことは無くて。

代わりに何を思ったのか、じつと彼の顔を見つめてきた。

彼はいきなりどアップで映った彼女に思わず立ち上がりそうになったが、

それを何とか押しとどめ背中だけ後ろへ仰け反る。

日付変更20分前に恋人に突然そんなことされたら誰だって慌てるだろう。

佐藤に限ってそういった裏のある行動は取らないことは経験上わかっていたので

一体何を考えているんだと、風呂上りのくせに冷や汗をかいた。

そして互いの意図するところは露知らず数十秒ほどが経って、

「うん、やっぱり高木君って人間が丸くなっただわ」

「は？」

「元々丸かったんだろうけど、警視庁に入ってもっと人間が出来たんじゃない？」

彼女は喉元につつかえたものが取れたようにすっきりとした顔つきで

至近距離だった姿勢を元に戻した。警察手帳も元あった場所に仕舞う。

一方予想外の返事に彼は一瞬意図がわからず考え込んだ。そして今度は数秒後。

「……つまり以前の僕は少し角がある？」

「そういつわけじゃないわよ。ただ、今に比べたらちよつとつきにくいかなって感じ。」

天下の警視庁捜査一課で揉みに揉まれ大人になったのよ、きつと」

良い事じゃない。

そうにつこり笑って彼女はやっと缶に手を伸ばした。

指ではじくと乾いた音と共に白い泡がアルミに飛び散る。

次には置いてあるままのもう一本にこつんと当てて、「かんぱーい」と告げ

おいしそうに飲み始めた。

自己解決したので彼女にとってこの話はもう終わりのようだ。

勝手に解決され啞然と彼は眺めながた。

そしてもう一度言われた言葉を頭の中で思い返す。

どうも自分は昔よりも穏やかになったという。

我ながら人に対してきつくあたったことは滅多にないと自負しているのだが、

それでもより今のほうが丸くなったらしい。

確かに昔は特定の人と親しくすることはあまり無かったかもしれない。確かに昔は特定の人と親しくすることはあまり無かったかもしれない。

誰かと仲が悪くなることも無かったが、特別仲良くなった覚えも無い。

誰にでも人当たりが良すぎるところを佐藤は逆に「尖っている」と感じたのだ。

それが数年経った今変わってきたということか。

同僚に親友がいるし、すこし険呑な雰囲気になる先輩もいる。

そして何より一番大切な人が出来た。

佐藤は「経験を積んだおかげだ」と言ったが、それは少し違うよう

に彼は思えた。

「どうしたの高木君、早く飲まないとぬるくなるわよ」

いつの間にか思考がここではないどこかへ飛び、微動だにしない高木に

彼女が不思議そうに覗き込む。

はっとして現実に戻り、視線が交錯したその眼はとても綺麗で澄んでいて。

尚且つ強い意志を秘めた光だった。

——そうだ、この眼だ

自分を変えたのは仕事だけではなく、彼女のこの眼に焦がれる思いのおかげなんじゃないだろうか。

胸を暖かくさせる何かが、目の前の女性と出会って生まれたのだ。そう思うと今いちぴんとこなかった自分の変化にも自覚できる。

まさか無意識の変化に他人の彼女が気付くとは驚きだったが。

それくらいは互いに近寄りあっていると考えて良いかも知れない。

そこまで考えると自然と笑みがこぼれた。

「ちょっとー、何笑ってんのよ」

「あ、すみませんなんでもないです。さあ早く飲んで寝ましょう。明日朝から動けるように帰りそのまま僕んち泊まっているんですし」

「…まーそうね。やっと互いの非番の日が合ったんだし久しぶりの遊園地を満喫したいな」

「平日だからきつと空いてますよ」

おきつぱなしになっていた缶を手にとって高木も栓を開ける。それにあわせて再び佐藤が乾杯の仕草をした。

現在23時50分。

明日は近い。

11、23時40分の恋人達（後書き）

オフラインが落ち着いてきたので久しぶりに投稿。

早く更新しないと「春一番」のくせに春がもう終わりです！（笑）

高佐のぐだぐだ話でしたが、久しぶりだと執筆に相当てこずりますね（汗）

カンを戻しにくい・・・

12、その女。。。につき、

空は快晴。

時は昼休み。

平次は指定席となつた屋上で雑誌をめくりながら弁当を食べていた。他に人はいない。

なぜならこの校舎は今年中に取り壊しが決まっている
無人の建物だつたからだ。

侵入禁止のそこをこっそり入って堂々とくつろぐ強者はそうそういない。

だから2、3日に1人の割合でしか来る者はいなかった。

そして平次はその中の一人で、一週間に一度くらいの頻度でここに来ていたのだがそれが彼にとって良い気分転換になっていたらしい。

いつものように弁当を食べ終えてから水筒を取り出し、

今度狙っているバイクの写真をしつつお茶をすすっていると

滅多に来客の無い階段への扉からノブを回す音がした。

入ってきたのは同じクラスの男子。

「やっぱりここにおつたな。服部ー、先生が5限後プリント集めて持ってきて来いやって」

「ああ、わかった。わざわざすまん」

「そう言うならこんなところいんといて欲しいわ。
ここ来るのホンマ神経使うんやで」

廃舎になつてから来たの初めてやわ、と言いながらクラスメートは不平を漏らす。

それに対して苦笑しながら平次は「じゃあお詫びにこれやるわ」と食後に食べるつもりであつた饅頭を一つ彼に向かつて放り投げた。育ち盛りの男子は弁当だけでは物足らないのだろう。

受け取つた彼はころつと笑顔に変わり、おおきにと礼を言つてすぐ口の中に入れた。

それでもぐもぐと味わいながら何かを思い出したように平次のほうを見る。

「そついやお前2組の遠山と幼馴染やつたよな」

「それがどないしたんや？」

遠山、という名前にぴくりと反応する平次。

座っている彼に対して、立つたまま食べていたクラスメートはごくつと饅頭を飲み込み視線を合わせるようにしゃがみこんだ。

「なんや知らんのかいな、昨日の武勇伝」

「最近互いに忙しいし3日ほど会つてへんねん。それよりなんや、その武勇伝って」

いつも一緒にいるわけじゃないと訂正を加えつつ少々物騒な単語に余計関心が引かれる。

聞かれた方はわかりやすい反応に満足しながら

手のひらを目の前に差し出し「お茶」と言う。

一瞬の間。

それを渋々破ったのは平次で、安上がりな交換条件におとなしく
しかしめんどくさそうに水筒のお茶を彼に渡した。

饅頭を飲み込んだせいで喉が渴いていた彼は焦らすように

ゆっくりそれを飲んだ後、誰も他にはいないくせに声を潜めて答えた。

「痴漢を退治したらしいで」

「何やお！？」

思わず平次の声が裏返る。

今にも突っかかりそうな勢いに慌ててクラスメートは話を続ける。

「遠山が遭ったわけやないで。あの子の友達が最近変な男に

電車の中で近寄られるって相談したんやと。

そこで朝一緒に同じ電車乗って、案の定近寄ってきた男の手を掴んだそうや」

「ほ……。それで武勇伝か」

武術の心得があり、且つ正義感の強いあの彼女のことである。

それくらいはいつかやりかねないことは平次も予想していたので
先ほどに比べたら間の抜けた返事をした。

だがクラスメートはそんな彼の態度に人差し指をちゅちゅと振る。

甘い甘い、と言わんばかりに。

「いや、それだけやないで？武勇伝はここからや。

遠山に腕捕まれた男がそのまま駅で降りたとき、振り切って逃げようとしたんや。

それをあの子は合気道で引きずり倒し、それでもなお這いずり逃げようとする

男の股間を思いっきりローファーで踏み潰したんや」

「……………ほお……………」

同じ返事をしたがその顔は若干引きつっていた。

セーラー服でどんだけ勇ましいこととんねん、と内心ツッコむ。

その時の状況を考えれば適した対処だっただろう。

犯人の急所を突いて動きを抑えるのは真つ当な手段だ。

とはいえ、朝の通勤ラッシュで人ごみが多い中

そんな立ち回りをされたら「武勇伝」が校内に広まるのは当然である。

一瞬その場面を想像しかけたが、何だかとてもなく男子にとって恐ろしそうな感じがしたので止めておいた。

そうやって平次が頭の中で様々なことを巡らせている側で、

クラスメートは感心するかのように何度も頷く。

「ホンマおつとこまえな話やで。天晴れやな。

お前もいっつもアホなことしてたらえらい目遭っで」

「アホいいなや。そうなる前に退散するわ」

「……アホなことはするんやな」

堂々と開き直る平次にすかさずつつこみを入れたクラスメートは、昼休みの5分前チャイムの音で思い出したように立ち上がる。そして「ほな、プリント頼むで」と言い屋上から出て行った。その後姿を見届けた平次もほっぱり出していた弁当の蓋をし、教室へ向かうべく同じように二本の足を立たせる。

背伸びをするとフェンス越しに話の種となった彼女が中庭で友人達と話している姿が見えた。

武勇伝など予想もつかないほど女子高生らしい笑顔で談笑している。友人の一人がなにやら落ち込んでいるようで、彼女がその肩に優しくぽんと手を置いた。

まるで姉と妹のようだと平次は思う。事件現場ではいつも自分の後ろをついて回っている彼女だが、自分がいないところでは随分頼もしく積極的に動いているのかもしれない。

——もしかしたら、状況によって自分の振る舞いを決めてるんやろか

何せ、誰よりも人の機微に敏感な人間だから。

そんな考えが思い浮かぶ。

警察の者を親に持つ彼女よりも明らかに世間慣れしていない同い年の友人の前では安心させるように果敢に動き、自ら積極的に動く自分、つまり服部平次の前では邪魔をしないように隣から見守る。

まさしくそれはケースバイケース。

「……案外大人かもなあ」

そんなことを呟きながら、彼は踵を返す。

そしてそのまま振り返ることなく扉を開けた。

ふと、和葉が何かを感じ屋上のほうへ視線を向けたのを彼は知る由も無い。

12、その女。。。につき、（後書き）

タイトルの。。。には皆さんお好きな単語を入れていただければ。

「その男凶暴につき、」とかそんな感じで。

和葉の武勇伝は何か頭に思いついたものをそのまま描写。

一体私は和葉をどんな女の子だと……（笑）

案外女友達の前では頼もしかったらいいな等とってます。

13、聞きたい声

携帯の目覚ましと共にふっと現実に取り戻される。

カーテンの隙間から漏れる朝日。

ようやく見慣れ始めた天井。

電源ボタンを押しアラームを止めると枕側にあった眼鏡をかけベッドから這い出て棚から食パンを一枚取り出す。

それをトースターに入れてから洗面所へと向かった。

こうやって一人で起きて一人で朝ごはんを用意するように
なってからどれくらい経っただろうか。

もうそれを寂しいと思うことすら無くなってしまったが。

顔を洗い、良い具合に焼け始めたパンをトースターから出し
丸テーブル上の皿にぽんと置く。

ゆっくりと腰を降ろし冷蔵庫から牛乳とバターを取出した。

牛乳をコップに注ぎバターをパンに塗る。

そしてテレビを付けた。

チャンネルをピッピッと回しながら結局はいつもの番組でボタンを
押す手を

止めることになる。

『昨夜起こった米花デパート内での殺人事件はあの毛利探偵が協力
したこともあり

未明のうちに犯人が逮捕され――』

やはり東京はよく事件が起こる。

口の中でバターの脂っこい汁が溶けるのを感じながらふと思う。自分が昔いた大阪でも事件はそれなりに起こっていたが、東京のほうが人口も多いし発生率も高いかもしれない。それにしてもこの毛利小五郎という探偵は事件によく遭う人だ。

そのままニュースを垂れ流しながらパンを平らげ牛乳を飲み干す。そして食器を洗い歯磨きも終え、吊ってあったブレザーの袖を通した。

まだ着始めて間もないのでぱりつとしたノリの感触が肩にかかる。若干違和感を感じたが仕方がない。いつまでここにいいのかはわからないが、それまでには慣れたいものだと思う。

一つため息をつき昨日のうちに教科書を入れておいた学生かばんを手にとった。

電気を消す。

戸締りを確認する。

そして付けっぱなしのテレビのほうを向く。

自然と目つきが険しくなるのがわかったが、それをじっと見つめた。画面に映っているのは大事な人をどこかに隠した忌々しい女。

エンディングが流れる中最後の笑顔を見せた。

何かが堰き戻されるような、熱さを覚える。

『それでは皆さん今日もお元気で。いつてらっしゃいませ』

なのになぜ自分は、毎朝毎朝この女の挨拶を見てからマンションを出るのだろう。

頭を深々と下げそしてもう一度カメラに向かって視線を戻すところまで

見届けてから電源を切る。

電子音の後すぐに画面は黒へと戻った。

自分の行動がわからず、リモコンを少しきつめにソファに投げつける。

そのまま振り返らず扉へと向かう。

——瑛ちゃん、いつてらっしやい

玄関から出る瞬間、さっきの彼女と姉の声がダブリながら頭に響いた。

14、贅沢な男

快晴の空の下大きな洋館の一角で響き渡る電話の呼び鈴。

黄金週間ということもあり、11時を過ぎた今でも惰眠をむさぼっていた新一は

のそのそと一階に降りて起きたばかりのかすり声で受話器を取った。

「もしもし」

「あ、工藤君おはよー！」

眠気を覚ますには十分な、元気よく飛んできた意外な声にびっくりする。

「遠山さん？」

「うん、そうそう。いきなり電話ごめんなあ。まだ寝てた？」

「……いや、ちょっと前に起きてたよ」

視線を泳がせながら少しだけさばを読む。

蘭や平次ならともかく、まさか11時でも思いつきり寝てたとは他人には言いにくい。

その見栄をそのまま受け取ったかどうかはわからないが、

彼女は言葉を続けた。

「そっか。それで用件なんやけど、私今日行けへんかわりに平次にクッキー持たせておいたし、また3人で食べといてね」

「え？」

クッキーが何だって？

別に今日は誰も来る予定は無かったはずだし、

当然和葉も東京に来るとは聞いていないにも関わらず

「行けない」とはどういうことだろうか。

咄嗟に今日のスケジュールを思い返してみたが、専ら一日中読書しか無かった。

あとは警察からの臨時のヘルプがあるかもしれないくらいで。

3人とは誰を指すのかも皆目つかない。

クエスチョンマークを頭の上に浮かべるかのごとく

当惑した新一をよそに和葉の声のトーンが一段上がった。

「あ、もう着くって今メール着たわ！工藤君、3人で今日は楽しく過ごしてな。あといくら休みやゆうても正午まで寝てたらあかんでー？」

最初電話出たときの声めっちゃ起きぬけやったしなあ、と天真爛漫にずばっと言う。

それも少しシヨックだったが、新一はその前の言葉のほづが気にかかった。

「え、どういっ……」

「私の役目はこの時間に工藤君を起こすことやってんよ。

部活の試合でそっち行けへん代わりにな。あの2人より先にお祝い
言えへんから、

とりあえずH A V E A N I C E D A Y っ」

「ちょっと待っ」

新一の呼び止めをスルーしてそれは切れてしまった。

「なんなんだ一体……？」

まだ電話音のエコーがかかる受話器を耳から離して思わずそれを
まじまじと見つめる。

寝ていたところに急に電話がかかってきて、それは自分をこの時間に
起こすためだったと彼女は言った。

11時に起こすその理由は？お祝いが言えないとは？

そんな考えをめぐらそうとした時、今度は玄関からインターホンが
鳴った。

今度は一体何だ？

彼が応対する間も無く、鍵の開く音がしてそのままバタバタと駆け
足で

こちらに向かってくる2人の足音がする。

そして思わず身構えた瞬間ドアがぱんと開いた。

「お誕生日おめでとう新一！」

「工藤おめつとさんー！！」

そこに現われたのはラッピングされた包みを持った蘭とクッキーと思われる箱を持った平次だった。突然の来訪と妙なテンションの高さに新一はぎよつとする。

「うわっ！いきなりなんなんだよオメーら！？」

「だーから、お誕生日おめでとうだって」

「……え？」

狐につままれたように目を丸くする彼に蘭は肩を落とした。

「やっぱり忘れてたのね、新一。私達が覚えてなかったらどうしていたの？」

「ホンマやわ。しかもまだパジャマやし。和葉にモーニングコール頼んで

おいて正解やったな」

俺って流石工藤の親友やなあと平次が一人でうんうんと頷く。

新一は何か言おうとしたが、さあとにかく正午までに掃除してごちそう食べるわよー!と、

気合をいれ腕まくりをする蘭の様子を見て留まる。

一週間ほど散らかしっぱなしだったリビングは本やらコンビ二弁当やらで散乱していた。

彼女は元々置いてあった自分のエプロンを引出しから取り出してきゅっと腰に紐を巻く。

一方の平次も、呆然とする新一の背中を押し「はよ着替えてこいや」とせつついた。

そうか。今日は自分の誕生日か。

押されながら壁に貼って有るカレンダーを見て日付を確認する。

5月4日。

何だかわからないが、とりあえず彼らは自分を祝ってくれるらしい。

本人すら忘れてた誕生日を。

ちゃんと祝えるよう電話で起こして。

昼前からプレゼントを持ってわざわざ家まで来て。

自分の代わりに掃除をして。

「……贅沢だな」

「何わけわからんこと言うつんねん工藤。」

はよ着替えんと昼に贅沢な料理食べられへんでー」

「そつよ、早く掃除しないとケーキを置けないわよ？」

この日と、この日この2人を囲む幸せが、最高に贅沢だと思う。

14、贅沢な男（後書き）

一応まだ5月なんで新一ハピバネタを。

お祝いということでレイアウトも少しいじってみました。

多分昼間は3人でわいわい、夜は平次が気を使ってお隣さんの家に泊まり

新一は蘭と2人でまったりディナーを楽しむ予定（笑）

恐らく次でラストです。

15、廻れ廻れ行き先不可視の運命のルーレットよ

「あなたは黒の57と赤の41に賭けたとします」

赤と黒それぞれ36番までしかないルーレットの、とある隣り合った2つの番号に
水性のペンで上書きした57番と41番。

黒の57は「コナン」

赤の41は「新一」

抑揚の無い声で哀はその運命を左右する白いボールをコナンの前にかざす。

インサイドベットの2目睹けた。

指定した落球区画にボールが入れば、2目睹けの場合18倍の配当が得られる。

口調を変えた小さなディーラーを彼は黙ったまま見つめた。

パソコンを借りにやってきた阿笠邸にいたのは同居人の少女と不在の主人が先日海外で気まぐれに買ってきた古びたルーレット。
何を思いついたのか、少女はテーブルからペンを取って先ほどの行動を起こした。

別にただの暇潰しである。

配当が本当に手に入るわけではない。

だが、上書きされた赤の41と黒の57という数字を遊びで見つめるには

いささかジョークが過ぎるかもしれない。

わざわざ書き直してまで自分の仮初めの名前と真実の名前をもじった哀のギャンブルは

洒落ているというより試されているように思えた。

「どちらも外したらどうしますか？」

何とも捉えにくい不思議な笑みを彼女は浮かべる。

遊びのゲームで配当が得られないのだから、外しても何も取られないはずだ。

しかし哀の問うそれはそんなことを指しているのではない。

黒57のコナンにも、赤41の新一にもなれなかったらあなたはど
うするのか。

心理的駆引きをこの盤上で哀は表そうとしていた。

最近黒の組織と繋がるような出来事は無く、にも関わらず不気味
な何かが

自分達の周りで包囲を狭めているかもしれない気がして。

彼女は何も言わなかったが確実に追い詰められている精神がそこ
はある。

そんな中取った行動がルーレットの2目賭け。

何かを察した彼が出した答えはギャンブルではありえないものだ
った。

「どうもしねえよ」

「……」

降参とも取れる返事に哀が若干睨む。

コナンはその視線を真っ直ぐ受け止め、推理するときのような不適な笑みを見せた。

「当たっても外れてもルーレットは廻るんだ」

その辺に落ちていた予備のボールを右手に取る。

左手で盤を思い切りよく廻しそこに落とした。

カラカラと白い球体が音を立てる。

「なら転がり続けようじゃねえか。この盤上のボールのように」

どこで止まるかはわからないけれど。

それでもルーレットは廻るから。

「……じゃあ盤が止まったら？」

「もっかい廻せばいいさ」

なんだかよくわからない理屈に哀はくすりと笑う。
コナンも少しだけ相好を崩した。

まあ、つまりはそういうことだろう。

「自分次第、ってところかしら」

「そう思っならそれでいいんじゃないのか？」

行き当ての無い運命を持て余す2人の下でくるくるからからとルーレットはまだ廻っていた。

15、廻れ廻れ行き先不可視の運命のルーレットよ（後書き）

これで最終話です。

次話で手短に後書きを書かせていただきます。

後書き

皆さん長い間お付き合いくださりありがとうございました。

「春一番」完結です。

数話後書きは書いていましたが、残りの数話を中心にして改めて一言二言書かせていただきます。

1、Tea Time （白馬＋平次）

白馬と平次は案外仲良くなれるかもという発想の下執筆。育った環境が似ていますし、共感できる部分が結構あるんじゃないかと思いました。

2、蹴つとばせ！ （高木＋由美）

3、富豪探偵 （新一＋平次＋警察の皆さん）

4、ミライヨソウズ （蘭＋園子）

5、振り上げた拳はどこへ行く （平次＋和葉）

6、belong （哀＋歩美）

恐らく最も皆さんからの反応が多かった話です。この2人の組み合わせが

何だかほのぼのしていて、でもどこか切ない感じがして好きですね。歩美ちゃんはラクロス部とか似合いそうな気がします。

7、突風少女 （京極＋園子）

表題の「春一番」は実は悲しい意味が込められていると知って「これは書かねば！」と思ったのがきっかけです。

作中一番ネタが好きな一作。

8、白と黒の奇妙な符合 （快斗＋白馬）

長編・カウントダウンのアフターストーリーを快斗を視点にして書いてみました。

コナンのキッドではあまり思いつきませんでした。が、まじ快の快斗なら迷ったり

悲しんだりすることもありそうだなと思っています。

作中一番サブタイが気に入っている一作。

9、完全犯罪 （新一）

私が最も書きやすい「暗に事実を仄めかす」台詞をふんだんに取り入れてみました。

わかる人にはわかる、わからない人にはさっぱりわからない話というのを

修行しているところです（笑）。作中一番構成が気に入った一作。

10、Flavor of Love （光彦+哀+α）

11、23時40分の恋人達 （高木+佐藤）

更新再開後一発目。あまり意識していませんでしたが、評価欄で大人っぽいと

言われ、もう一度読み返してみたら何だか今までの中で一番ラブ度が高い話だと

気付きました（爆）。ぼーとしながら書くと、いつの間にかラブ度が高くなるようです…

12、その女。。。につき、 （平次+α）

「振り上げた拳」に続く、お姉ちゃん的和葉の第二弾。

蘭もそうですが、和葉も女子校でモテるタイプなんじゃないかなと。

13、聞きたい声 （瑛祐+？）

まだコナンノベルズ内では少ない本堂瑛祐を使って切なめ話を。

原作派もコミックス派もアニメ派も、どれでも通じるように書いて

みたつもりです。

14、贅沢な男 （新一＋蘭＋平次＋和葉）

短編・ああ雑草の流れを受け継いだかのような引き篋もり新一（笑）で一発。

15、廻れ廻れ行き先不可視の運命のルーレットよ （コナン＋哀）

坂井泉水さんの訃報を聞いてすぐ「運命のルーレット廻して」が頭の中で流れ、瞬間的に思いついた話がこれでした。

一昨日まで書く予定の無かったものです。実は最終話はちゃんと別のギャグ話を

用意していたのですが、急遽変更して持て余す感情と勢いで書き上げました。

暗さの中に光明を見出せるような話を…と思ったのですが、結果としてどうなったのかは

自分でもわかりません。ただ、坂井さんへの「ありがとう」という気持ちが入ってることは確かです。マイフレンドが一番好きでした。

というわけで、以上です。

今までの中で一番好き勝手に自由に書いた話のように思います。

平次を例外とし、できるだけオールキャラを目指してみました、蓋を開けてみれば

高木と園子と哀が予想以上に出ていました（笑）。

書きやすいことも含め、結構この3人がお気に入りだったようです。ちなみにネタとか雰囲気とか全て考えた上で一番自分の中で

好きな話は「突風少女」か「完全犯罪」かもしれせん。
只今スランプでもがき続けておりますが、「春一番」が終わり
今度は「夏」をテーマにその内同じような一話完結型を
書けたらいいなと考えています。

あとは、出来たら詩以外でもオリジナルをぼちぼち…

コメント下さった方々本当にありがとうございました。
そして途中更新停滞が続いて申し訳ありませんでした。
これからも書き続けますので、別の話でもまたお越しくだされば幸
いです。

では失礼いたします。

2007年5月30日
y o s h i n a

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4239b/>

春一番

2010年10月9日06時41分発行